

# 玉ねぎ栽培のコツ

淡路島・緑町農業協同組合

## 上 田 善 章

淡路島の玉葱栽培は、主に貯蔵用として、11月から翌年の2～3月にかけて出荷をするものであるから、貯蔵性の高い品種、また貯蔵性が高くなるように栽培され、研究されて来た。また品種も在来種から交配種へと、かわりつつある。

第1表 栽培型と品種

栽培型	地帯	品 種	播種期	定植期	収穫期	出 荷 販売期
早生栽培	暖地	貝塚早生 今井早生	9 上 9上・中	10 下 11 上	4下～5中 5中～6上	収穫同時 5中～6下
貯蔵栽培	全般	淡路中高黄 交 配 種	9中・下	11中～12上	6 上	7下～10下 10下～12下 12下～3下

多収のカギとなる越冬率、抽苔率、球の肥大ともに苗

の大小に密接な関係がある。

抽苔にある一定の大きさ以上になった苗が、15℃以下の低温にあって花芽分化し、その後の日光と高温によって花茎が伸長して、抽苔する苗が小さければ、低温にあっては抽苔をおこさない。

越冬率を高め、大球を得るには大苗を植えるのがよいのだが、大苗になるほど抽苔率が高くなる。

しかし、全く抽苔の心配のない小苗よりも、5%程度抽苔するくらいの大苗を植える方が増収となるので、定植苗は根部の直径(根元から4～5cmくらい上部の太さ)が6～8%程度のものがもっともよく、8%以上もある極太苗は、抽苔率も高いから使わない方がよい。反対に4%以下の細苗は抽苔の心配は少ないが、増収は望めない。収穫は茎葉が80%程度自然倒伏したときに、晴天を選んで行なう。貯蔵は吊り小屋に収納する。貯蔵小屋は幅3.6m長さ5.4m高さ2.7mの大きさが普通で、30cm間隔に7段の架木を渡してかける。この小屋で20a(11t)の玉葱を貯蔵できる。

(耕種概要は下記のとおり。)

### 耕 種 概 要

- ① 播種時期 9月20日前後
- ② 播種量 10a当り5～5.5dl
- ③ 苗床面積 10a当り40～50㎡
- ④ 苗床肥料 1a当り苦土石灰10kg、窒素2.55kg、燐酸2.1kg、加里1.95kg
- ⑤ 播種法、種子は苗床3.3㎡当り3.5ml～4.5mlの割で

厚薄なく散播し、軽い腐植土を覆土して灌水する。苗床の土壤消毒をかね、オーソサイド800倍を3.3㎡当り6l程度灌注し、発芽するまではコモを敷しておく。その後間引や土入れ、追肥を本葉2枚程度の時に行う。

病害虫防除は立枯病オーソサイド800倍、べト病、細菌性腐敗病等ダコニール600～800倍を、害虫防除にはサクチオン乳剤の800倍液を使用する。

定植期の限界としては、平均気温が5℃以下になると発育は止まるから、植付けた苗が、厳寒期までに完全に活着していることが必要である。

定植後、完全に活着するまでに1カ月ぐらいかかるので、定植は発育のとまる1カ月前にすませることが必要で、淡路では、平均気温が4～5℃になるのは1月中旬以降であるから、12月中旬頃までに植付を終るようになっている。

次に本田の栽培について述べる。

定植は育苗日数50～60日で、草丈24～27cmで根元の直径6～8mm(前にも述べた)位で、100本の重さが375～500gぐらいのものを使う。

栽培距離は畦幅135cmで株間10～12cmで、4条植で10a当り3,000～2,700本植が普通である。

次に、玉葱栽培上大切な条件として、施肥技術がある。玉葱の生理から、栄養生長期と生殖生長期に、パランスのとれた肥料の施用が大切である。このような点から施肥設計(例)を下に示す。

第2表 施肥基準 (kg)

	総量	元肥	追 肥			N	P	K
			2月上	3月上	4月上			
堆 厩 肥	1,200	1,200				3.6	2.4	4.8
玉葱化成	40	40				4.0	8.0	8.0
燐硝安加里 S604	60		30	30		9.6	6.0	8.4
NK化成	20				20	3.6		2.8
苦土石灰	100							
合 計						20.8	16.4	24.0

施肥は1～2月の乾燥期と土質(和泉砂岩系の砂壤土および壤土)などを考慮している。

特に2月の乾燥期の施肥と、3月の肥料吸収の多い栄養生長期に、すみやかに肥効を現わすようにする点と、遅ぎきをしないこと(4月中下旬～5月頃。遅効きをすると品質や貯蔵性に関係する)が大切な点ではないかと思う。

4月の追肥は、一応、生殖期以後の維持肥料と考えること。その後、4月下旬から5月にかけての雨量によって施肥する場合がある。